



小同窓の人々

永代美知代

櫻が色づいて来て、方々の呉服店でそろそろ、春衣の賣出しが初まる時分の事である。美佐子は田舎出の従妹にたのまれて、二人で今川橋そばの松屋へ出掛けで行つた。

もうひけ近い午後の四時前と云ふ時ではあつたが、二階の見切り場は戦さ場のやうに込み合つた。

年若い、つい此頃上京したばかりの従妹の眼には、見える限りの品物が何でも皆な好もしく珍らしい。着物を買ふ、帯を買ふ、と云つた處で、田舎に居ては、僅かばかりの品物しかない町の太物やから、一反か二反か、多くて十反とはなない包を取りよせて、その中から比較的氣に入つた縞柄を擇り抜く位なもので、従妹

は十八歳の今日が日までも、まだ斯うした場所に入つた事はないのである。

『あらまあ、こんな立派な柄がある……』

斯う美佐子の袂を引いては、頻りに感嘆する。

『嫌だ、そんな野暮つぽい柄なんか、あよしなさいよ』

一口にけなされては赤くなり、従妹は手に執つた一つ、一つを、あかず眺めて居るのであつた。

ふと美佐子は驚ろいた。

『小原さん……』

危く聲を立て、呼ばうとした。

美佐子はいつの間近に立つて、友禪羽二重の柄を見立て、居る女を見た——それが舊友の小原さんにそっくりだと思つたのである。

だが美佐子はためらつた。何故といつてその女は黒つぽい、變な布で造つたガウンに似た、松屋の雇女の揃ひに着て居る職業服を着込んで居るのだから、それによし小原さんが、松屋の雇女になつて居たにしても、美佐子は聲をかけ度いやうな、掛け度くないやうな、

變な氣持ちであつた。

小原さんとはもと、美佐子がある地方のミツション、スクールに居た時分の友達で、その頃はまた二人とも、肩揚げの深いものを着た少女であつた。

二人は同じやうに、情にもろい性質の、詩の好きな、夢みがちな、年頃も丁度どつちかつの、親しい同志であつた。お揃ひの巾着リボンをお下髪に結んで、二人はよく雑誌を抱いて、學校のグラウンドををどろあつた。サマー、ハウスや、花蔭に寄り添ふて、泣きながら泣菫の詩集だの、藤村の落梅集などに讀み耽つた事もある。

美佐子はその頃の事を思ふと、昔戀しい涙にさそはれるのが常である。小原さんを懐かしく、その折々の思ひ出に、如何しても此人を忘れる事は出来なかつた。だがふとした出来事から小原さんが學校を去つて、それから後の事を考へると、美佐子は何ともならぬ不快な感じがする。

『私は全くあなたの犠牲よ、私はあなたの身代りみた

美佐子は嫌な氣持ちになつた。

『犠牲だなんて、そんな事知るもんですか、皆な自分勝手に結婚なすつたんぢや無くて、私の身代りも無いもんだわ』

美佐子は面と對つて、斯うも云つた。そして二人は妙に離れ／＼の氣持になつたのである。だが美佐子は、折々傳へられた友の消息に、胸を痛めないでは居られなかつた。

『此間久し振に小原さんに逢ひ度いと思つて、植村先生を訪ねるとね、小原さんは居なくつて、淺井さんが大丸醫で先生の傍にゐ坐つてゐるのよ、私本當に呆れ返つたわ』

ふとした處で、美佐子は斯うした噂を耳にした。

『でもね私馬鹿だから氣がつかないのよ、小原さんはつて訊くとね、如何でせう、あんな人はもう、此處の家と關係ありません、私が植村の妻ですつて、澄してゐるんですよ』

話した人は面白さうに笑つた。

いなものだわ、廣い世界に、私ほど不合せな女はありませうよ』

美佐子によく、斯うした言葉を小原さんの口から聞かされた。手紙でも屢々書いて送られた。それは色々込み入つた事情もあるが、美佐子は學校時代に、植村と云ふ國語の教師から戀された。文章好きの美佐子は、小原さんと二人で、よく此教師になつてゐた。涙もろい性質から教師に同情して、美佐子への手紙を取り次いだその罪で、小原さんは學校を追はれたのである。そしてその後戀の人を失つた小原さんは、失戀同志の植村先生と新しい家庭を持つた。家庭に入つて妻となり、母となりした小原さんの苦勞は、確かに人並以上であつた。良人としての先生は、教室で考へたやうな善良な人ではなかつた。盛に放蕩もすれば、生活も豊かな方では無く、自然小原さんは、馬鹿々々しい犠牲と云つた事を考へさせられないではゐられなかつた。

だが小原さんから、さうした事を聞けば聞くほど、

淺井さんと云ふのは、これも以前××學院に居た人で、植村先生の直ぐ前の國語の教師の細君である。美佐子が初めて入學したその頃には、如何かすると、五つ位の可愛いお嬢さんの手を引いて、淺井先生と三人で夕方の散歩に出掛けたり、若い美しい奥さんを見かけた事もあつた。それがその後、學校に入つて、美佐子達と一緒に、英語を學んだり、普通學を教はるやうになり、淺井先生が他へ轉任の後、奥さんだけは後に残つて、二年以上も寄宿舎に寢起きをするのであつた。

細りと色白の、綺麗な人でふつくりと、出した底髪に、海軍色の袴がよく似つた。舎監の信認も厚く、生徒達は皆な『淺井さん』と呼ぶうちにも、もとの教師の奥様としての尊敬を忘れなかつた。

その淺井さんに就いて、美佐子を初め、××學院同窓生一帯を驚ろかした記事が、東京の諸新聞に載せられたのは、美佐子が小原さん對淺井さんの噂を聞き込んだ、つい十日ばかり前の事なのである。

その記事は實に、思ひ掛けも無い事であつた。

××學院を卒業後、淺井さんは名古屋地方の女學校に英語の教師を勤めて居た。するうち、稻葉某と云ふ救世車の士官と通じ、嬌曳の爲め、二人は屢々旅行をしたが、汽車賃を誤間化す積りで、淺井さんは、學校から自分に與へられた割引券を、情夫に役立てやうとして、稻葉某を同じ女學校の教師だと偽つた。それが解つて、檢事から告訴されたと云ふのである。

美佐子は信じる事が出来なかつた、ともすれば、美しいメリンスの被布を着た、おかつぱの可愛いお嬢さんの手を引いて歩く、その頃の初々しい、淺井さんの姿が目先きにちらついた。細面の上品な、あの淑やからしい淺井さんに、如何してそんな事が出来たらう。

美佐子はまた、むつちりと黙り込んだやうな、淺井先生の淋しい、俤を思ひ浮べた。まことに物柔らかな、如何にも國語の教師としてふさわしい人であつた。文章好きな美佐子はこの先生からも、人並以上の愛顧を受けた。國語や作文の時間中、先生は奥さんの淺井さ

んにも、他の生徒と同じやうに教へねばならなかつた。美佐子達年若い小女等は、先生がどんな態度に出るか、それを興ある事に思つて、そつと見守つた。

『お次ぎ』

『その右』

『その前』

先生は屹度斯う云つて、讀み方を當てるにも、淺井さんの名前をささないで、奥さんに當てようと思ふ前には定つて、その後か隣席の者に讀ませるのが癖であつた。

美佐子は淺井先生から手紙を貰つた。それは先生が轉任になつた初めての夏休みが了つて、九月の新學期に寄宿舎へ歸つた時の事である。手紙には、自分は懐しい皆様と離れなければならなくなつたけれども、妻だけは都合でまた學校へ歸す事にした、どうぞ親しく交つて呉れるやうにと云つた意味で、淺井さんの上を氣遣つた言葉が、細々と認められた。

是非仲よしになり度い！斯う思ひながら、美佐子は

何故か淺井さんと親しめなかつた。

『だが、如何して又、淺井さんは、植村先生の處に居るのだらう？』

美佐子にはこれも解らなかつた。まさか植村先生が小原さんを追出して、友人たる淺井先生の奥さんと一緒にになるやうな事はなからうと疑つても見た。だが不思議な噂は又しても傳へられた。

それは植村先生が官吏侮辱罪で拘引されたと云ふ噂である。淺井さんのために法廷に立つて盛んな辯護をやつた上、それでもさかれないくつて、淺井さんの罪が定ると、しまひに判事を罵倒した。某檢事が被告に秋波を寄せたのを、被告が取り合はなかつたその爲めに、下らない事を告訴されて、普通以上の刑を受けるのだと云つたやうな、馬鹿々々しい事まで口走つたとか。

その頃植村先生は或る新聞社の記者であつた。名古屋で淺井さんの一件があつた時、丁度その地に行き合せて居た先生は、はからず警察所にひかれて、悄氣返

つた淺井さんと出合つた。そして氣の毒に思つて、東京の自宅へ連れて來た。それから如何云ふいきさつで、小原さんを出したのか、淺井さんの情人だと云つた、稻葉某は如何なつたのか、美佐子もその邊の込み入つた事情は聞かなかつた。

だが兎に角小原さんが植村先生の家を出て、實家の兄さんの處へ歸つたのは事實であつた。

美佐子は又斯うした噂を人傳に聞かされた。

『小原さんは異人の妾になりかけた』

而もその對手の異人と云ふのは、イギリスの宣教師である、そして仲介者は日本の東京の、有名な牧師だと云ふので、××學院出の連中は、奇るとさわると問題にした。

『小原さんのやうな方があるから困るんですわねえ』斯う憤慨する者も些なくなかつた。

『だけ共あの人も可哀さうな境遇なんだもの、無理も無いわ』

そして斯う同情した者も、あながち美佐子一人では

なかつた。

イギリスの宣教師は病身な妻と二人で、はるく海を渡つて、極東の日本へ来た。してその目的と云ふのは、體の健かな、客貌の美しい若い女を一人、雇ひ入れ度い爲めてあつた。道德的制裁のさまでさびしくない、自由な國情を聞き傳へた彼等は、夫妻相談の上で相携えて、病身な妻の助手を探しに來たのである。「妻も承諾して居ます、是非妻の助手を一人世話して下さい。そしてその助手は家庭に入れる者だから、イエス君を信じる神の僕でなくてはなりません」宣教師は吳々斯う繰り返して頼んだ。「御尤です、信者の中から御紹介致しますえう」仲介者の牧師は眞面目な人であつた。妻君の助手と云ふ言葉を、字義通りにしか解釋する事の出来ない人であつた。

小原さんは第一の候補者として、宣教師の前に出た。美しくいと云つた側では無いが、嫌味の無い愛嬌をおびた顔だけは、ヒステリックな妻君の氣にも入つた。

に住み込んで苦學した。編輯局には當時流行つたサンライスの空箱が盛んに散亂つた。兄さんはその空箱を一つ一つ拾ひ集めて、中から女の子の喜びさうな、美しい寫眞書を丁寧に抜き取つて置いては、田舎の片山蔭に、たつた二人の父と暮した、淋しい妹に送つたものである。××學院時代には、まだ兄さんの地位も低く、小原さんは十分な學費を受ける事が出来なくて、學院から幾らかの補助を仰がねばならなかつた。しかし兄さんからの手紙には溢れるやうな慈愛と、そして燃えるやうな熱誠が籠つて居た。

美佐子は小原さんと二人で、その手紙を讀んで、自分まで胸を踊らせた。

その親しかつた兄妹の間に、いつとは無く越え難い隔が出来た。或る者は嫂さんの罪だとも云ひ、或る者は又、小原さんが無理から兄さんに存いて、植村先生に嫁いだせいだとも云つた、全く植村先生と兄さんとの間は圓滑ではなかつた。だから淺井さんと先生との關係から、小原さんが實家へ歸つた時も、兄さんは屹

その日直ぐ夫妻は小原さんを連れて三越へ行つた。帯を買ふ、小袖を買ふ、そしてその贅澤な品々に添えて、宣教師は手づから小原さんの指に、高價な寶石入りの指環を贈つた。

小原さんは餘りに手厚い待遇を不思議に思ひ初めた。何だか不氣味なやうにも考へられる——小原さんは最初の夜の、眞夜中頃に宣教師の家を逃げ出して、牧師の家へ駆け込んだ。

「馬鹿者めが！何故おれに黙つてした？」

兄さんの機嫌は悪かつた。兄さんは自分に無断で、宣教師に雇はれやうとした小原さんの態度を喜ばなかつた。妹の一人位如何にかし得ない自分ではないと云ふのであつた。だが小原さんの身になつて見るとそれは無理である。

早くに母に死なれて、貧しい家庭に育たねばならなかつた兄妹は、普通以上に友愛の情にはあつた。殊に兄さんの妹思ひは非常なもので、兄さんは十六七の頃志を立て、上京したが、某新聞社のボーイ

度喜んで迎へたに相違ない。だが小原さんは嫂の手前を心苦しく思つた。知る限りの人に頼んで、一人で適當な職業を見付けようとして焦つた。

宣教師の事があつてから後、美佐子はまた小原さんが、力行會の世話で渡米するとか、せぬとか、さうした話のあるのを聞き込んだ。渡米の目的は無論、何の慰藉も無く異境に働いてゐる同胞の中から、終生の良人を選んで、カナダの理想郷に楽しい家庭を作るためなのである。

美佐子は訪ね度いと思つた。だがあなたの犠牲だ、身代りだと、小原さんの云つたさうした言葉を思ひ出すと、堪らない程の忌はしさに、如何しても強て行かうと云ふ氣持にはなれなかつた。

植村某等の公判
美佐子はその後幾度と無く、斯うした新聞の記事に眉をひそめた。

世間には随分公明正大でありながら、たちのよく無い新聞雑誌社に關係した爲め、思ひ掛けも無い惡黨の

やうに見られたり、不慮の災難から入牢しなければならぬやうな、苦しい破目になる人もある。美佐子は植村先生の入牢を、そうした風に解釋したいと思つた。官吏侮辱——それは浅井さんのためなのである。そして詐僞取財——美佐子はその内容を知る由も無かつたが、その時植村先生の關係して居た雑誌社は、悪徳雜誌として可成り名高いものであつた。

美佐子は斯うした事件までは知つてゐた。その後植村先生が如何なつたか、小原さんが渡米したか如何か、事にまぎれて考へても見なかつたのである。

その小原さんが今、つい目の前に立つて居る。以前よりも少しく肉が落ちて、けつく品よくなつたやうに思はれる横顔を、美佐子はじつと黙つて見守つた。

「何？何？」

従妹は不思議さうに嘔きながら、美佐子の傍へ寄つて來た。

「何でも無い、一寸と知つてゐる方かと思つてさ」

斯う美佐子は小原さんを氣にしながら、そつと答へ

うな氣がして、わざとに小原さんの變な身装を見ないやうにした。先刻から手持ち無沙汰な様子をして差扣えた従妹と、一通りの挨拶も済んで、小原さんは淋しく笑つたが、華やかな調子で話し掛けた。

「妙なものを着込んだでせう」

「さうね」

美佐子も微笑んだ。

「何時から？」

「もう去年の秋、十一月のあの時からよ」

「え？」

美佐子は小首を傾げた。

「アラまあ、冷淡だわねえ」

「何故？」

美佐子の顔は心持ち曇つて見えた。だが小原さんはそれに氣もつかなかつた。

「何故も無いわ、植村はあなた、また行つたのよ」

小原さんの表情で、美佐子は直ぐ、それと覺る事が出來た。

た。

「一寸と周どんつたら、この柄は私に如何でせう？」小原さんは羽二重の布を高く差揚げ、此處いらを見張つて立つた手代を呼び掛けた。

「何にするんだか、それが解らないで、好いも悪いも云へるもんぢやない」

「定つてゐるぢや無いの、帯だわ」

美佐子には、その蓮葉な言葉が聞きづらかつた。

「アラ！」

ふとした拍子に視線を合せた二人は、殆んど同時に寄り添ふた。流石にその眼は懐かしさに輝やいて見えた。

「お買ひ物？」

「え、従妹が來たがるもんだから」

「お従妹さんて、よく云つてらつしつたあの伯母様の？」

「いゝえまた他の」

斯うした白々しい會話の中も、美佐子は氣の毒なや

「まあね、永くなの？」

「……この六月に歸るんだわ、だけどねえ、色んな事を考へると私、嫌んなつちやつてねえ……」

小原さんは俯向いた。そして直ぐ又涙ぐんだ眼を擧げて、美佐子の顔を仰ぎ見た。

「兎に角彼方へ行きませうか、ね、休息室でお茶でも頂させようよ」

「え、休息室があるの？」

「あるわ、食堂だつて、三越にまけやしませんよ」

従妹は莞爾微笑んだ。

「あなた何をお買ひなさるの、あとで私のにして割引いて貰つてあげますからね、又ゆつくり御覽なさいな」

「有り難う、だけでも其内に時間がされるでせう」

「否大丈夫ですの、五時限り店の戸はしめますけれど、ナニ大丈夫なんですすよ」

「でも小原さんが居なかつたら駄目なんてせう、其點は便利だわねえ」

「松屋の雇女を友達に持つのも、一寸と好もんでせう」

三人は華かに笑ひながら歩いた。

「一寸とあなた、お子さんは幾人」

二階の梯子段の青い段道を踏んで、小原さんは思ひ出したやうに立止まつた。

「一人よ、あなたは？」

「二人、初めの女の子は御存じてせう、あれから又去年男の子が産れたのよ、だけれどもねえ、それが大變なの、眼を病んでねえ——以前私婦人科で入院した事があつたてせう、皆な植村のせいなんだわ——可哀相にとうとう子供の眼がつぶれちやつたのよ」

「オア！困るでせう」

「困るわ、田舎の里に預けてあるわ、だつて私此處へ出て働かなくちや、如何する事も出来ないんですもの」

「兄さんは？」

「……だから私色んな事を考へるのよ、ね、いつそ植村の來ない間に、女の子を引取つて別れちまはうかと思つて」

「どうして如何するつもり？」

「行衛不明になつちやうんだわ」

「……フ、」

「だつてあなたつてば餘り冷淡なんだもの、植村はあれから四度目よ、それだのにあなたつてば些少も知らないで居るんだもの」

「知る筈が無いぢやありませんか」

「だから冷淡だつて云ふんだわ」

「何故でせう？」

美佐子は黙つて唇を噛んだ。

「何故それを一々私が知る筈なんだか、何故私があなたの不運に責任を持たねばならんのか、私はそんな理由を誌めない！」

斯うたて續けに怒鳴りつけもし度かつた、だが美佐子は二人きりでないのに氣がついて、強て胸をおさめた。

従妹は先刻の子供の訃から、急に小原さんの人一倍蒼白い顔が氣になつた。そしらぬ容子をしては、折々盗むやうにそつと見た。

完